

## 5年生での日本の気候の特色の取り扱い

### 1 工夫されていた点

まず1点目に、グラフからの読み取りがしっかりと抑えられていた点である。社会科教育で子ども達に求められる力の一つに地理的リテラシーがある。今回の授業の場合、特に気候の単元であるので、地図的技能だけではなく、雨温図からの読み取りのスキルが求められる。授業者は、上越市といわき市の気温と降水量について、慌てず順番にまず気温、次に降水量と読み取らせていった。またその読み取る手順も、例えば降水量であれば、まず年間降水量、次にいつ多いのか、そして全体的な傾向という手順で体系的に読み取らせていた。グラフをどのように読み解いていけばよいか、きちんと手順を踏んで、ポイントを押さえながら読み取らせていたのである。「社会科は資料教科」と言われるほど、資料の活用が問われる教科であるが、資料を読解するプロセスをしっかりと押さえていた。

次に2点目として、基本的な社会認識のプロセスを踏まえて授業を構成した事である。前述の様に、授業者はまず上越市といわき市の雨温図から読み取れる事実を抑え、その後になぜ二市は緯度がほぼ同じなのに気候の違いがあるのかを考えさせていった。すなわち、事実認識→関係認識の流れである。いわばスタンダードな社会認識のプロセスを踏まえての内容構成であった。

最後に3点目として、問題解決的な学びを活かしていた事である。学習活動の④にあたる「上越市といわき市の気候の特色は、他の太平洋側や日本海側の地域にも当てはまるのか確かめる」部分で、直ぐその答えを求めて学習活動に入るのではなく、「どうしたらこのことがわかると思う？」と問いかけていた。すなわち、内容知ではなく方法知を問うたのである。こうした手法は、1998（平成10）年版学習指導要領において強調された「調べ方を学ぶ」「学び方を学ぶ」といった手法であるが、社会科においては、初期社会科の問題解決学習において既に提唱されていた手法である。問題解決学習における特色の一つであるが、それを活かして展開していた。

### 2 実践して見えてきた課題

まず1点目に、具体的数値の読み取りである。前述した様に雨温図からの読み取りはしっかりと実施されていたものの、やはり「多い」「少ない」等の抽象的なレベルに留まる読み取りも少なからず見られた。5年生であれば、しっかりと数値として読み取らせたい。

次に2点目は、主題の置き方である。今回の授業では、「緯度がほぼ同じなのに、なぜ上越市といわき市の気候には違いがあるのだろうか」であった。しかし、むしろ「気温がほぼ同じなのに」と雨温図からの読み取りからストレートに主題を置いた方が、課題が明確になったのではないかと考えられる。

最後に3点目として、季節風と台風の混同が見られた事である。季節風は、1年間の中でまさに時期によって向きが変わる一定の風の事であり、台風はいわばイレギュラーな風である。子ども達の中には、こうした季節風と台風を同意のものとして捉えていた児童もおり、その点の違いはしっかりと抑えておきたい。

いずれにしろ、実践は問題提起性の富むものであり、今後の活躍に期待したい。